

第3回加賀ふるさと検定 上級問題【正解及び解説編】

1 旧石器時代の終わり頃から縄文時代始め頃の遺跡と推定される（ ）からは、斧形石器や槍先形尖頭器が出土している。

- ①永井遺跡 ②塩浜海岸遺跡 ③橋立大野山遺跡 ④大堰宮遺跡

橋立町大野山で発見された斧形石器と槍先形尖頭器は、旧石器時代の終わり頃から縄文時代始め頃の遺物と推定されています。橋立丘陵には、石川県内でも最古級の遺跡が続けて発見されており、今後、さらに貴重な遺跡が発見される可能性があります。【正解率89.6%】

2 出土した土器には東海・近畿系や関東系が含まれ、石器では中京系の石斧や長野県和田峠の黒曜石の石刃もあり、（ ）は東西文化の接点であったことを示している。

- ①横北遺跡 ②藤の木遺跡 ③打越遺跡 ④保賀遺跡

大聖寺川右岸の辺りで発見された藤の木遺跡は、県内でも最多の縄文時代中期の土器が発見されています。出土した土器は北陸特有の古府式土器や上山田式土器・大杉谷式土器のほか、東海・近畿系土器や、関東系土器があります。石器では中京系の石斧や、長野県と群馬県の境にある和田峠産の黒曜石で作られた刃物などがあり、当地域が縄文時代において、東西文化交流の接点であったことを示しています。【正解率81.3%】

3 柴山出村遺跡から出土した柴山出村式土器は東北地方の影響が強く、（ ）の様式を色濃く残していると言われている。

- ①縄文時代中期 ②縄文時代晩期 ③弥生時代前期 ④弥生時代中期

柴山出村遺跡は弥生時代前期末の遺跡で、北陸では最も古い靫や県内最古の弥生土器が発見されました。この遺跡から出土した土器は、柴山出村式土器と呼ばれ、東北地方の影響が強く、縄文時代晩期の様式を残しています。【正解率33.3%】

4 片山津玉造遺跡から発見された^{くだたま}管玉の原石は、動橋川上流域で採取した緑色凝灰岩質の（ ）とみられる。

- ①頁岩^{けつがん} ②安山岩^{あんざんがん} ③滑石^{かつせき} ④珪岩^{けいがん}

片山津玉造遺跡は、4世紀から5世紀前半にかけての玉造職人集団が住んでいた場所と考えられています。ここからは、33基の住居と工房を兼ねた竪穴式住居跡が発見され、首飾りなどの装飾品に使う管玉や勾玉などの玉類が発見されました。ここで使用されていた原石の多くは緑色凝灰岩質の頁岩で、これらは動橋川の上流で採取したものと考えられています。これらの玉類は大和王権に送られ、さらに全国の有力豪族に配分されたと考えられています。【正解率39.6%】

5 加賀市の（ ）遺跡は、建造物の規模や墨書土器などの出土品から見て、飛鳥・奈良時代における郡の中心官庁か有力豪族の住居跡と考えられる。

- ①加茂 ②西島 ③庄 ④七日市

昭和47年に発掘調査された西島遺跡は、奈良時代から平安時代にかけての遺跡で、柱跡からみる建造物の規模が大きく、また、須恵器に墨で文字を書き込んだ墨書土器が6点見つかるなど、一般住宅とは考え難く、律令制下の郡の中心官庁である郡家もしくは有力豪族などの住居として使われたものではないかと考えられています。【正解率41.7%】

6 文永 10 年、熊坂庄をめぐって、領家である（ ）と地頭おおみさねやすの大見実泰との間で争いが起きたが、鎌倉幕府は同庄を領家と地頭わよちゅうぶんで土地を折半する「和与中分」とした。

- ①高辻家 ②園家 ③徳大寺家 ④中院家

鎌倉時代、荘園領主と地頭との争いを解決するため、土地を折半し、相互に侵犯しないようにしました。これを「下地中分」といいましたが、この下地中分をお互いに、和解・示談で行なうことを「和与中分」といいます。江沼郡の熊坂庄の地頭職をしていた大見実泰は、文永 10 年（1273）、この庄の当時の領家であった公家の徳大寺家の預所（現地管理者）と争い、とうとう領家と地頭とで土地を折半するという条件で示談としたので、「和与中分」となります。【正解率 56.3%】

7 北陸一円では、蓮如上人のもとで急速に浄土真宗が広まったが、その背景には浄土真宗の本尊が（ ）の本地仏である阿弥陀如来であったことが影響したと考えられる。

- ①白山御前峰ごぜんがみね ②白山大汝峰おおなんじがみね ③白山別山べっさん ④立山雄山おやま

北陸一円では蓮如上人のもとで浄土真宗が急速に広まっていきましたが、浄土真宗の本尊が白山大汝峰の本地仏でもある阿弥陀如来であったことが考えられ、そうした背景もあり、それまでこの地に広まっていた「白山信仰」と浄土真宗が、融和していったものと考えられます。白山信仰と浄土真宗は、近世以降も引き継がれ、現在も市内神社の 5 割弱で白山神を祀り、また、寺院では浄土真宗が 8 割を上回るなど、白山信仰と浄土真宗は、当地の信仰心の核となっています。【正解率 66.7%】

8 文明 18 年頃、江沼郡の門徒が蓮誓を山田坊に迎え、山田光教寺が成立したが、蓮誓は基盤強化のため、さらに（ ）坊や瀧野坊を創建した。

- ①九谷 ②菅谷 ③黒瀬 ④南郷

蓮誓は、蓮如の 4 男で、号を光闡坊と称しました。蓮如が吉崎での布教を決意した時、越前の門徒への人質として吉崎へ送られたともいわれています。後に加賀国山田坊（加賀市山田町）に入って山田光教寺を建立しました。その結果、蓮如の子どもでもある、蓮悟（若松本泉寺）、蓮綱（波佐谷松岡寺）と共に、「加州三ヶ寺体制」を築くこととなります。蓮誓はその後、基盤強化のため、さらに九谷坊や瀧野坊を創建しました。【正解率 20.8%】

9 弘治元年、越前の朝倉宗滴が江沼郡に進撃し、一揆勢を潰滅させようとしたが、このとき、宗滴は（ ）の金吾ヶ城に本陣を構えた。

- ①錦城山 ②朝日山 ③敷地山 ④観音山

弘治元年（1555）越前の朝倉宗滴が一向一揆を潰滅させようと、加賀に大挙して侵入し、ここに 10 余年にわたる加越抗争が始まりました。江沼郡の一揆勢は総力をあげて朝倉勢の進撃を阻止しようとしたが防ぎきれずに江沼郡の一揆勢の運命は風前の燈となりましたが、敷地山の金吾ヶ城に本陣を構えていた総大将朝倉宗滴が発病し、朝倉勢が急遽、越前に引き上げたことで、事なきを得ました。【正解率 52.1%】

10 大聖寺の本善寺に伝わる古九谷色絵孔雀図平鉢こくたにいろえくじゃくずひらばちは初期九谷焼の伝世品と推測され、技法の特徴から初期（ ）の色絵陶器や明末の色絵磁器に類似することが指摘されている。

- ①有田焼 ②瀬戸焼 ③京焼 ④美濃焼

加賀市指定文化財の「古九谷色絵孔雀図平鉢」は、口径 32.7 cmのやや深めの大皿で、古九谷窯創設に指導的な役割を果たしたとされる後藤才次郎ゆかりの寺である大聖寺の本善寺に伝えられてきました。特徴として紺青が空色かかった発色をし、呉須の線描も、厚く上絵付けする技法などから、九谷焼初期の伝世品と推測されており、初期京焼の色絵陶器や中国明末の色絵磁器に類似することが指摘されています。

この出題に関しては、本善寺が所蔵する「古九谷色絵孔雀図平鉢」が、京焼や中国色絵磁器とも類似性があるという、故北出不二雄先生などの指摘もあり、加賀市教育委員会発行の「加賀市の文化財」や、当会議所で作成した「加賀市歴史文化学習帳」で、この説を掲載したものであります。

しかしながら、古九谷は本来、有田（伊万里焼）との関連性があるなかで、本善寺所蔵古九谷が、京焼や中国色絵磁器とも類似性があると指摘されたものであり、決して有田との関連性を否定する意味ではないということでもあります。そのために、選択肢に「有田焼」と「京焼」の両方があったことは、問題としては不適当と判断し、今回の採点においては、「有田焼」と「京焼」のいずれも正解とさせていただくこととしました。お詫び申し上げます。

【①と③の両方を正解とさせていただきます】

- 11 大聖寺藩 14 代藩主前田利としかあつらの元服の際にうのはないとおどしにまいどうわらべぐそく誂えたとされる卯花絲威二枚胴童具足は、利としかが藩主となる前、加賀藩の（ ）家を相続していた頃に作られたものである。
- ①前田対馬守 ②前田出雲守 ③前田土佐守 ④前田大和守

加賀市指定文化財の卯花絲威二枚胴童具足は、大聖寺藩最後の藩主、第14代前田利としかが元服の際に誂えられたとされています。具足には、吹返や胸板には家紋の梅鉢が施されていますが、大聖寺家の棒梅鉢でなく、一般的な梅鉢紋であることから、利としかが大聖寺藩主となる以前、加賀藩の前田土佐守家を相続していた頃に作られたもので、その工芸技術の高さから金沢の「加賀藩御細工所」で製作されたのではないかと考えられています。【正解率64.6%】

- 12 深田町の「鏡の池」には、篠原の戦いで斎藤実盛が髪を染める際に使ったとの伝承をもつ和鏡が、（ ）製の容器に納められ、池の底に安置されている。
- ①凝灰岩 ②粘土 ③銅 ④真鍮

市内深田町の東側にある約12㎡の小さな池は「鏡の池」と呼ばれ、夏の渇水期でも枯れることはなく、池底に、平安時代後期から鎌倉時代のものでとされる鏡が、凝灰岩製の容器に納められ安置されています。この鏡は直径8.5cmの銅製の和鏡で、篠原の戦いの際、斎藤実盛が髪を黒く染める際に使った鏡だとする伝承があります。【正解率27.1%】

- 13 大聖寺藩では、14代藩主前田利としかが宝生流の能楽普及に力を注いだため、現在でも毎年正月2日のお松囃子に、錦城能楽会により「高砂」(たかさご) 「猩々」(しょうじょう) の3番が演じられている。
- ①「実盛」 ②「安宅」 ③「敦盛」 ④「東北」

大聖寺藩では14代藩主前田利としかが特に宝生流の能楽普及に力を注ぎ、弟子もこれを熱心に守り伝えたため、他地域では途絶えた「謡初め」の行事が今日まで続けられてきました。現在では毎年正月2日に、利としか公の遺影の前で錦城能楽会の人たちにより「高砂」「東北」「猩々」の3番が舞われ、それぞれの間に狂言や小舞が演じられています。【正解率31.3%】

- 14 江沼郡出身の天台宗の僧侶である延えんしょう昌の事績をもとに創作された謡曲『敷地物狂』は、（ ）の作とされている。
- ①観阿弥 ②世阿弥 ③金春禅竹 ④音阿弥

世阿弥の娘婿に当たる^{こんばるぜんちく}金春禅竹は室町時代の猿楽師、能作者で、「敷地物狂」の作者でもあります。「敷地物狂」は、江沼郡出身の天台宗の僧侶である延昌の事績をもとに創作されたといわれる謡曲で、菅生石部神社が舞台となっています。【正解率 14.5%】

15 音韻学者の明覚は、延暦寺で学び、山代の温泉寺に隠棲し、() などの研究成果を著して我が国の50音字の配列に大きな影響を与えた。

- ①口遊^{くちずさみ} ②孔雀経音義^{くじゃくきょうおんぎ} ③いろは歌 ④悉曇大底^{しったんたいてい}

明覚は、平安時代後期の僧で音韻学者。「めいかく」とも読みます。天台宗の延暦寺で学び、のち加賀山代温泉の温泉寺に隠棲して「温泉房」と号し「加州隠者」と称しました。悉曇学や梵字の発音などを研究し、我が国の50音字の配列に大きな影響を与えました。その代表的な著作に『悉曇大底』があります。【正解率75.0%】

16 江沼郡赤尾を拠点とした一向一揆の大將藤丸新介は、朝倉宗滴の南郷城侵攻で敗退した後、天正10年、柴田勝家との戦いで敗れ、() において自刃したとされる。

- ①魚津城 ②高岡城 ③七尾城 ④末森城

藤丸新介は、江沼郡赤尾（現加賀市山中温泉滝町付近）を拠点とした一向一揆の大將です。天文24年、朝倉宗滴が江沼郡に侵入してきたとき、新介は南郷城で黒瀬掃部丞らとともに迎え撃ちましたが敗退。このあと新介は赤尾を捨て横北に逃れたと伝えられています。その後、新介は越後の上杉景勝に仕え、魚津城の守備につきますが、天正10年、織田方の柴田勝家に攻められ魚津城で自刃したといわれています。【正解率18.8%】

17 丹羽長秀の与力溝口秀勝は、天正11年に() の大聖寺城主として江沼郡を統治した。

- ①4万石余 ②5万石余 ③6万石余 ④7万石余

戦国武将の溝口秀勝は、尾張国中島郡西溝口村（現愛知県稲沢市）の出身で、天正12年、丹羽長秀の与力として、大聖寺城4万4000石を与えられました。翌13年に長秀が死去し、堀秀政の与力となりましたが、引き続き大聖寺城を治めました。その後、堀秀政の子秀治が春日山城に移ると、秀勝も6万石を得て新発田城に移りました。【正解率87.5%】

18 小早川秀秋の家老^{げんぼ}山口玄蕃は、慶長3年に7万石の大聖寺城主として江沼郡を統治した。玄蕃は() の出身で、茶の湯や能楽に通じる当時の文化人であった。

- ①筑前国 ②筑後国 ③大和国 ④山城国

堀秀治の春日山移動により、秀吉の家来で、筑前・筑後（福岡県）の領主であった小早川秀秋が北庄（福井市）に入り、江沼郡も支配することになりました。大聖寺城には秀秋の家来であった山口玄蕃頭宗永が入り江沼郡7万石の支配者として当地を治めました。宗永は山城国（京都府）の出身で、筑前・筑後の検地を

実施するなど理財の道に優れていました。また、千利休に茶の湯を学んだり、能楽にも通ずる当時の文化人でした。【正解率58.3%】

19 大聖寺城代の初代、太田長知は、慶長7年、加賀藩2代藩主前田利長の命により利長の重臣（ ）によって金沢城で斬殺された。

- ①横山長秀 ②近藤長広 ③横山長知 ④小塚権太夫

加賀藩2代藩主前田利長は、関ヶ原の戦いで大聖寺城主山口玄蕃頭宗永を攻め滅ぼしたことで、徳川家康から、それまでの領地に加え、能美郡や江沼郡を新たに領有しました。そのため、寛永16年(1639)に大聖寺藩が成立するまでは、金沢から派遣された太田長知や小塚権太夫などが城代として江沼郡を支配しました。慶長7年、大聖寺城代の初代太田長知は、金沢城で横山長知に斬殺されていますが、この原因に、親徳川派の立場にあった横山長知と反徳川派寄りであったとされる太田長知の確執が考えられています。【正解率54.2%】

20 大聖寺藩祖前田利治は、承応2年に藩財政不足のため、家老の玉井市正をはじめ、家臣（ ）を加賀藩へ返還した。

- ①14人 ②24人 ③34人 ④44人

大聖寺藩祖前田利治が初めて大聖寺に入部するとき、宗藩から連れてきた家臣の数は106人と記録されていますが、これは士分格のみの数で、このほかに徒や足軽、小者、陪臣などを含めるとこれよりもかなり多いと考えられます。そのため、利治は、14年後の承応2年(1653)に藩財政不足を理由に、筆頭家老の玉井市正貞直をはじめ家臣24人を加賀藩へ返しました。【正解率60.4%】

21 大聖寺藩初代藩主前田利治は九谷村・熊坂村に金山を、（ ）村に銀山を開発した。また、木地師の保護や九谷焼の製造など殖産興業に努めた。

- ①曾宇 ②片谷 ③塔尾 ④大土

「土田家文書」によれば、大聖寺藩祖前田利治は鉱山の開発に注目し、九谷や熊坂に金山を、曾宇に銀山を発見したとあります。但し、実際に金や銀を産出したかどうかは不明です。また、『加賀江沼志稿』には曾宇村の南約4キロに銅山があり、安政年間、大聖寺藩が採掘したと伝えています。【正解率72.9%】

22 大聖寺藩では、塩屋、小塩、瀬越、塩浜、片野村などで漁業が盛んであった。このうち、塩屋村の猟船(漁船)数は、天保15年、領内で最も多い（ ）であった。

- ①15艘 ②25艘 ③35艘 ④45艘

『加賀江沼志稿』によると、江戸時代、塩屋村の猟船(漁船)の数は25艘と最も多く、これに小塩村が13艘、瀬越村が10艘、塩浜村が7艘、片野村が6艘などと続いていました。塩屋村の田畑は僅かであり、そのため、村の産業は廻船業や漁業が中心となっていました。【正解率27.1%】

23 柴山潟では、戦前まで「ツケ」という特殊漁法が行われていた。これは晩秋に（ ）の枝を潟端に沈めて置き、早春にその回りに立網を張り、魚を獲る漁法であった。

- ①マツ ②サクラ ③スギ ④クヌギ

柴山潟では、フナ、コイ、ウナギ、ナマズ、テナガエビなどの淡水魚を対象とした内水面漁業が行われてきました。特に、戦前までは、フナ・コイなどを獲るために、「ツケ」と称する特殊漁法が行われていまし

た。これは晩秋に桜の枝を潟端に沈めて置き、早春に、その回り張った立網を引き上げ、中の魚を獲るというもので、他では見られない漁法でした。【正解率64.6%】

24 大聖寺藩 2 代藩主前田利明は、寛文年間に、山城、（ ）の両国から茶の実を購入し、領内の村々に配分した。

- ①駿河 ②美濃 ③近江 ④大和

2 代藩主前田利明は寛文年中（1661～72）に山城（京都府）・近江（滋賀県）両国から茶の実を購入し、領内の村々に配分しました。茶役は、江戸後期では、串村が銀43 匁で最も多く、これに山代村が29 匁余、保賀村が25 匁余、片山津村が18 匁余と続きました。打越村は弘化元年（1844）に宇治茶の製法を導入して以降、領内第一の生産地となりました。【正解率52.1%】

25 大聖寺藩の橋立・塩屋・瀬越村からは、多くの北前船主や船頭がでた。寛政 8 年の「船道定法之記」には、橋立村に北前船主や船頭が（ ）いたと記されている。

- ①32 人 ②42 人 ③52 人 ④62 人

大聖寺藩の橋立村・塩屋村・瀬越村では多くの北前船主が出ましたが、いずれも北前船の寄港地ではありませんでした。橋立村では、船主の一部が近江商人のもとで船乗りとなり、やがて独立して北前船主となった歴史があります。橋立村の古い記録『船道定法之記』を見ると、寛政 8 年（1796）に42 名もの船主や船頭がいたと記されています。【正解率62.5%】

26 大聖寺藩では、正徳 2 年に、農民が問屋や十村宅を打ちこわす百姓一揆（正徳一揆）が起こった。このとき、山代村の十村（ ）が打ちこわしに遭った。

- ①堀野新四郎 ②河原屋安右衛門 ③和田半助 ④鹿野小四郎

正徳 2 年（1712）8 月、大聖寺藩領内に強風が吹き、作物などに大きな損害がでましたが、藩は年貢米の取り立てを例年どおりとしました。これに不満をもった農民たちが、検分していた役人たちを襲い、庄、山代、山中などの問屋や十村宅をつぎつぎと打ち壊しました。このとき打ち壊しに遭った十村宅というのは、山代村の河原屋安右衛門宅でした。【正解率16.7%】

27 参勤（参観）は江戸へ行くこと、交代（就封）は国元へ帰ることをいうが、大聖寺藩では、藩政期 230 年の間に、参勤交代を合わせて（ ）実施した。

- ①89 回 ②121 回 ③154 回 ④181 回

大聖寺藩の参勤交代は、江戸に行く参勤（参観）89 例と国元に帰る交代（就封）92 例が記録に残っており、その合計は実に181 回となります。大名行列の人数は、ほとんどが250～300 人程度でしたが、文政 5 年（1822）4 月の 9 代利之による交代は、最大の397 人を従えて行われました。【正解率79.2%】

28 大聖寺藩では、文政 8 年の異国船打払令を契機に塩屋・橋立・日末の 3ヶ所に御台場を築造した。塩屋御台場には、嘉永 3 年（1850）に大砲（ ）が置かれたという。

- ①1 挺 ②3 挺 ③5 挺 ④7 挺

大聖寺藩は文政 8 年（1825）のフェートン号事件に伴う「異国船打払令」の発令を契機に、塩屋・橋立・日末の 3ヶ所に御台場を築造しました。嘉永 3 年（1850）には、塩屋御台場に大砲 3 挺、橋立御台場に大砲 5 挺、日末御台場に大砲 2 挺が置かれた記録が残っています。【正解率66.7%】

29 大聖寺藩では、5代利直の42ヶ年や2代利明の33ヶ年を除けば、在任期間の短い藩主が多かった。特に、13代利行としみちの在任期間は最も短い（ ）であった。

- ①5ヶ月 ②8ヶ月 ③11ヶ月 ④1年2ヵ月

大聖寺藩の第13代藩主前田利行は、天保6年加賀藩主前田斉泰の5男として金沢で生まれ、安政2年、兄で大聖寺藩主であった利義が死去したため、急遽、その養子として跡を継ぐことになりました。ところが家督を継ぐ直前に金沢で死去しました。改易を免れるために、このことは幕府に隠し、家督を相続した後の5か月後に死去したことにしました。そのため表向きは、13代利行の在位期間は5か月となっています。【正解率77.1%】

30 明治4年7月には、廃藩置県みことりの詔により大聖寺県が誕生した。大聖寺県は、同年、金沢県に合併されたので、（ ）間での廃県となった。

- ①1ヶ月 ②4ヶ月 ③8ヶ月 ④10ヶ月

明治4年7月、廃藩置県により、大聖寺藩は廃止され、新たに「大聖寺県」が誕生しました。しかし、この年の11月に、大聖寺県は金沢県に合併されたので、大聖寺県が在ったのは、僅か4ヶ月間のこととなります。なお、金沢県も明治5年2月には石川県と改称したので、これ以降、当地は石川県江沼郡となりました。【正解率91.7%】

31 大聖寺藩は、明治3年(1870)に浦上キリシタン50人を預かり、庄兵谷の鉄砲場の長屋に収容して仏教への改宗を迫った。このとき、改宗者は（ ）であったという。

- ①12人 ②18人 ③35人 ④42人

明治政府は、神道国家を進めるために、キリスト教の国内布教を認めず、明治元年4月に、浦上(長崎)の信徒3300人余りを全国20の諸藩に分けて配流しました。明治3年、大聖寺藩では、50人のキリシタンを預かり、大聖寺庄兵衛谷の鉄砲場の長屋に収容しました。藩では、御預けキリシタンたちの改宗を迫るため、藩内の各真宗寺院に説諭を命じましたが、結局、50人のうち、5人が病死し、残り45人のうち、改心した者は18人であったと伝えています。【正解率93.8%】

32 明治政府は、明治11年に太政官布告で天皇の北陸道・東海道の巡幸を公布した。この巡幸は右大臣岩倉具視や参議大隈重信ら、総勢（ ）を従えて行われた。

- ①182人 ②346人 ③567人 ④798人

明治天皇は維新後の明治5年から明治18年までの間に計6回にわたって日本国内を巡幸されました。これは民情を視察し、新政府の適否をさぐり、あわせて天皇統治権の浸透を図るためといわれています。明治11年に行われた北陸道・東海道の巡幸は、右大臣岩倉具視や参議大隈重信らを従え、総勢798人という空前の人数でした。【正解率43.8%】

33 明治政府は明治4年に文部省を設立し、同5年に学制を公布した。江沼郡大聖寺には、錦城・京達・有隣・（ ）の4小学校が設立された。

- ①開陽 ②旗陽 ③得知 ④新知

石川県では明治6年に区学校規則が定められ、この規則に基づき、江沼郡では、大聖寺に錦城・京達・有隣・旗陽の4校を設置したことをかわきりに、郡全体に21カ所の小学校が設立されました。また、この後、小学校が3カ所、巡回授業所が7カ所、設置されるなど、明治13年頃までに頻りに統廃合が繰り返されました。

【正解率47.9%】

34 昭和23年、福井県丸岡町付近を震源とする福井地震が起こった。このとき、江沼郡では、死者（ ）、負傷者451人、住宅全壊791戸など、甚大な被害を受けた。
①18人 ②39人 ③68人 ④87人

昭和23年(1948)6月28日の夕方、福井県坂井市丸岡町付近を震源とするマグニチュード7.1の大地震が発生しました。地震の規模は極めて浅い直下型地震であったため、江沼郡内でも死者39名、負傷者451名、住宅全壊791戸、半壊1231戸と大きな被害を出しました。【正解率18.8%】

35 大聖寺藩士（ ）は、弘化2年(1845)に領内の地誌、神社仏閣記、藩士の紀行記、諸家の碑銘などを集めた『藩国見聞録』を著した。
①小塚秀得 ②塚谷沢右衛門 ③奥村永世 ④宮永理右衛門

『藩国見聞録』は弘化2年(1845)に大聖寺藩士であった奥村永世が著述したもので、領内の地誌、神社仏閣記、藩士の旅行記、諸家の碑銘などを集めたものです。奥村家は大聖寺藩の槍術師範の家柄であったが永世は武術を好まず、歴史に関心が強く、山野を歩き、城跡を訪ねて由来を書き留めていたといえます。【正解率22.9%】

36 馬嶋健吉は、初め、金沢の黒川良安に学び、さらに大坂の緒方洪庵の適々齋塾に入門、蘭学を修めた。その後、（ ）と共に渡欧し、外科・内科・眼科などを学んだ。
①石川^{たかし}嶂 ②渡辺^{わたなべ}卯三郎^{さぶろう} ③竹内^{たけのうち}玄同^{げんどう} ④樫田^{かしだ}玄覚^{げんかく}

馬嶋健吉は、大聖寺藩医であった馬嶋全庵の長男。初め金沢の黒川良安の門下生となり、安政6年(1859)に緒方洪庵の適塾に入門、蘭学を修めました。その後、健吉は石川嶂の支援を受けて渡欧し、外科・内科・眼科などを学びました。【正解率39.6%】

37 飛鳥井清は、明治10年に旧大聖寺藩士の柿沢理平を工場長にして「加州松島社」を創設し、鉛筆製造を始めた。理平の墓は（ ）境内にある。
①全昌寺 ②久法寺 ③宗寿寺 ④実性院

大聖寺藩士柿沢理平は、もと山川家の次男でしたが、弘化4年に柿沢家に養子に入り、明治期、大聖寺県の権大属や会計掛などを務めていました。明治10年、片谷村で黒鉛が発見されたことで、飛鳥井清や瀧謙などに頼まれて鉛筆工場の職工(のち工場長)を務めました。大聖寺寺山ノ下寺院群の一つ、久法寺には柿沢理平の墓があり、その戒名には「制鉛院造筆日肇居士」と刻まれています。【正解率72.9%】

38 深田久弥は、昭和8年に、小林秀雄らと（ ）を創刊し、「呼ぶ冬山」「一家」「一昼夜」「街」などを発表した。
①新思潮 ②改造 ③文芸春秋 ④文学界

大聖寺出身の作家、深田久弥は、大正15年に東京帝国大学文学部に入学し、在学中、改造社編集部勤務しました。昭和5年『文芸春秋』に「オロッコの娘」を発表したことで、同年大学を中退し本格的に作家活動に入りました。以後、「津軽の野づら」「あすなろう」などを発表し作家として認められました。昭和8年、小林秀雄、川端康成ら共に『文学界』の創刊に加わりました。【正解率31.3%】

39 大聖寺藩では、城下の西端に関所、越前との国境である吉崎村、風谷村、（ ）
などに口留番所くちどめばんしよを置き、往来人を監視した。

- ①橋村 ②熊坂村 ③九谷村 ④真砂村

大聖寺藩では城下町の西端に関所を設置しました。また、このほかに、吉崎村・風谷村・橋村に口留番所を置き、越前との往来を監視しました。口留番所とは、江戸時代、各藩が自藩の境界や交通の要所などに設置した番所のこと、関所の要件を満たさない小規模なものを指しています。【正解率60.4%】

40 大聖寺藩主（ ）は、鷹狩りや遊芸を好み、藩政をかえりみず、天明2年に加賀藩主11代前田治脩はるながから金沢城幽閉ゆうへいを命じられた。

- ①4代利章としあきら ②5代利道 ③6代利精としあき ④7代利物としたね

大聖寺藩の5代藩主前田利道の次男、前田利精は、兄が早世したために、安永7年に大聖寺藩6代藩主となりましたが、父が死去すると、遊郭に頻繁に通ったり、無法を繰り返すようになり、これら一連の行動に本家の加賀藩主前田治脩も諫言しましたが、利精は聞く耳を持ちませんでした。このため治脩は、利精を「心疾」として金沢城に監禁し、家督を利精の弟である利物に継がせました。【正解率39.6%】

41 江沼平野から続く海拔100m以下の低地山間部は（ ）と呼ばれている。

- ①加賀砂丘 ②江沼丘陵 ③加賀台地 ④白山台地

加賀市の地形は大きくは低地、台地、丘陵山地の3つに大別されます。低地の中心は江沼平野です。また、低地の北側は日本海に面し、江沼砂丘と呼ばれています。台地部分は、海拔20～60メートルの緩やかな起伏をともなった段丘で、片野町から黒崎町・橋立町にかけての橋立台地や大聖寺川や動橋川の中流域付近での河岸段丘となっています。一方、江沼平野や台地から続く、海拔100メートル以下の低地山間部は「江沼丘陵」と呼ばれるところで、なだらかな起伏や丘が続く丘陵地となっています。【正解率77.1%】

42 日本列島の地層で最も古いとされる飛騨変成岩の地層が、加賀市の（ ）付近でも見られる。

- ①尼御前岬 ②加佐ノ岬 ③錦城山 ④山中温泉九谷

地層は、通常は、上に積もっているものが新しく、下へ行くほど古い地層になります。加賀市では大聖寺川や動橋川の上流にいくにしたがって古い地層が見られる特徴があります。日本における最も古い地層である飛騨変成岩地層は、当地では、大聖寺川の上流域である九谷地区に局部的に見られます。【正解率89.6%】

43 富士写ヶ岳では、（ ）、キクザキイチゲなどのようなスプリング・エフェメラルと呼ばれる春植物が多く見られる。

- ①ニチニチソウ ②カタクリ ③キンモクセイ ④サルスベリ

富士写ヶ岳ではツツジの女王とよばれるシャクナゲが美しく、大型連休には登山者で賑わいます。また、地表にはカタクリやキクザキイチゲのような「スプリング・エフェメラル」とよばれる春植物が見られます。ニチニチソウやキンモクセイ、サルスベリはいずれも夏から秋にかけて花をつける花木です。【正解率85.4%】

44 加賀市には、ため池が多く、そのため、() のような止水性のトンボを多く見かける。

- ①ハグロトンボ ②オニヤンマ ③ギンヤンマ ④ムカシトンボ

止水性トンボとは、池や湖、沼など水がほとんど流れない場所に生息するトンボでその代表がギンヤンマです。一方、流水性トンボとは、水が常に流れている川や運河に生息するトンボで、ハグロトンボやオニヤンマ、ムカシトンボなどがこれにあたります。【正解率27.1%】

45 加賀市内でも外来種の動物が多く生息し、生態系に大きな影響を与えているが、私たちがよく見かける() も外来種である。

- ①キジバト ②カラスバト ③ドバト ④アオバト

土鳩(ドバト)とは、学名カワラバトのことで、本来ヨーロッパ、中央アジア、北アフリカなどの乾燥地帯に生息する鳩ですが、一説には飛鳥時代から平安時代に、既に日本に入ってきたと伝えられる外来種で、国内で古くから生息している「ヤマバト」「キジバト」とは区別されています。【正解率33.3%】

46 昭和30年頃から、当地方でも電気洗濯機が普及し始めたが、それまでは、盥(たらい)、洗濯板、() の3点が、娘が他家に嫁ぐ際の必需品となっていた。

- ①洗濯箱 ②干し物竿 ③張り板 ④洗濯棒

戦後しばらく、電気洗濯機が普及するまでには、主婦は、盥(たらい)と洗濯板を使って、手作業で洗濯をしました。また、洗濯した着物などは、糊をして板張りする「洗い張り」をしました。そのため、この時代、「たらい・洗濯板・張り板」の3点は娘が他家に嫁ぐ際の必需品でした。【正解率75.0%】

47 戦後においても、農民や漁師など外で作業をする人々の多くは、麻や木綿を織り込んだ() と称する作業着を着た。

- ①サックリ ②ハバキ ③ハオリ ④タンゼン

木綿が普及する以前は、おもに麻から繊維をとって糸を作っていました。この麻を織って作った作業着を当地では「サックリ」と称しています。麻の衣服はゴワゴワして硬いために、やがて木綿を織り込んだ柔らかいサックリも使いました。【正解率81.3%】

48 昭和40年頃までは、市内の多くの家では、夏の夜、蚊に咬われないように、就寝の際は部屋に() を吊るして寝ていた。

- ①蚊屋 ②蚊帳 ③蚊棚 ④蚊家

蚊帳(かや)は、麻などを素材とした1mm程度の網目状に編んだ布で、夏、寝室にこの蚊帳を吊って寝ることで、蚊などの虫は通さず、窓を開け放して寝ることができました。蚊帳の使用は古代にまで遡り、エジプトのクレオパトラが愛用していたといわれます。日本には中国から伝来し、当初、貴族などが用いていたそうですが、江戸時代以降、庶民にも普及しました。【正解率100.0%】

49 例年、4月に行われる大聖寺の桜祭りは、() の春祭りである。

- ①江沼神社 ②菅生石部神社 ③加賀神明宮 ④大原神社

大聖寺の桜祭りは、加賀神明宮の春祭りのことで、大聖寺の全町が参加する大きな祭りです。毎年4月15

日から17日までの3日間をかけて行われます。15日は「宵宮」、16日・17日は「本祭」として行われています。近年では4月の第2土曜・日曜に行われています。【正解率91.7%】

50 加賀や越前などで古くから作られてきた、サトイモの茎を利用した郷土料理「ズイキの酢の物」は別名（ ）とも呼ばれる。

- ①ツキ ②スコ ③クズ ④ズッコ

ズイキとは、芋の中心から出た茎という意味で「髓茎」が語源だという説があります。ズイキは平成14年に加賀野菜として認定されました。ズイキの酢の物は、「スコ」とも呼ばれ、食物繊維・カリウムも豊富であり、慢性的な便秘や高血圧にも効果的だといわれています。【正解率87.5%】

51 山中温泉には、天然記念物の大杉が何本もあるが、このうち、菅谷町八幡神社の大杉は別名「（ ）大杉」と呼ばれている。

- ①二又 ②三又 ③親子 ④天覧

山中温泉からおよそ1.5km、大聖寺川の上流域にむかったところ、菅谷町の八幡神社境内にある大杉は、幹周7.3mの大スギで、樹齢は2,300年と伝えられてきました。地上3メートルのところまで3つに分かれているために、別名「三又大スギ」とも呼ばれています。【正解率62.5%】

52 山代温泉の薬王院が所蔵するには、（ ）は、白山五院の一つ大聖寺の後身、慈光院にあったもので、白山信仰の遺品として貴重なものである。

- ①泰澄大師尊像 ②五輪塔 ③木造十一面観音立像 ④阿弥陀如来像

山代温泉薬王院が所蔵する「木造十一面観音立像」は、もと白山五院大聖寺の後身、大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、慶長5年、大聖寺城主山口玄蕃頭宗永が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れ、明治維新後、同じ白山五院の一つであった薬王院に移されました。十一面観音は白山主峰の御前峰の本地仏で、平安時代末期の白山信仰の遺品として貴重です。【正解率91.7%】

53 加賀市が所蔵する国指定の重要有形民俗文化財「白山麓の山村生産用具及び民家」と「白山麓の積雪期用具」は、（ ）から寄付されたものである。

- ①山下久男 ②新家熊吉 ③伊藤常次郎 ④稲坂謙三

民具収集家、伊藤常次郎は、能美郡新丸村小原（現小松市）出身。郷里である小原がダム建設のため湖底に沈むと知り、民具の収集に奔走し、およそ3万点の民具を集め体系的に整理しました。加賀市分校町に居住していた繋がり、これらの民具およそ4,800点余りと民家1棟を加賀市に寄付しました。この膨大な民具は、現在、加賀市中央公園の歴史民俗広場の民俗収蔵庫に収められています。【正解率70.8%】

54 平成22年度の加賀市の産業別就業者の比率を見ると、飲食・サービス業、旅館業などの第3次産業に従事する人口はおよそ（ ）%を占めている。

- ① 40 ② 50 ③ 60 ④ 70

平成22年の国勢調査によれば、加賀市の産業別就業者の比率は、農林水産業などの第一次産業が3.1%、建設・製造業を中心とした第二次産業が35.1%、飲食店やサービス業、運輸業などに従事する第三次産業は60.0%となっています。石川県全体の数値と比較すると、第三次産業の比率が大きいのが特徴です。【正解率47.9%】

55 平成 26 年度版の石川県統計によれば、県全体の漁船総数は 4,745 隻となっており、そのうち加賀市は（ ）隻を占めている。

- ① 85 ② 173 ③ 385 ④ 654

JF いしかわの「平成26年6月版統計」によると、県全体の漁船総数（動力船）4,745 隻に対し、加賀市は 173 隻となっています。その内訳は、3 トン未満が112 隻、3～5 トンが44 隻、5～20 トンが17 隻となっています。【正解率29.2%】

56 昭和 49 年に、塩屋、橋立、（ ）の 3 つの漁業協同組合が合併し、「加賀市漁業協同組合」が誕生したが、現在は石川県漁業協同組合加賀支所となっている。

- ①片野 ②篠原 ③塩浜 ④黒崎

当市における漁業協同組合の歴史を見ると、もともと塩屋・橋立・篠原の3 地区に漁協が設置されていましたが、昭和49 年にこれら3 漁協が合併し、新しく「加賀市漁業協同組合」が誕生しました。その後、県内各地の漁業協同組合がさらに一本化する動きが出て、平成18 年9 月、石川県内の沿海27 漁協が合併し「石川県漁業協同組合」が発足し、加賀市漁協はその組織の中の「加賀支所」となりました。【正解率22.9%】

57 加賀市では、糖度の高い（ ）かぼちゃの生産がおこなわれており、JA かがでは、これを原料とした焼酎を商品化している。

- ①小菊 ②さくら ③味平^{あじへい} ④打木赤皮

一般的に広く流通しているのが「黒皮栗かぼちゃ」で、味平かぼちゃもこの品種の一つです。果肉は粉質で、糖化するデンプンが多く、加熱すると甘味が増してホクホクとした食感になります。かぼちゃ本来の深い甘みがあります。加賀市では、この糖度の高い「味平かぼちゃ」の生産に力を入れており、およそ 65 戸余りの農家が約 37ha の畑地で栽培し、南加賀地区におけるカボチャの一大生産地となっています。【正解率 93.8%】

58 加賀商工会議所が設立されたのは、昭和 44 年 4 月 1 日のことで、その初代会頭には（ ）が就いた。

- ①新家熊吉 ②吉田豊彦 ③矢田松太郎 ④山田泰三

昭和43 年12 月、商工会議所設立総会が開催され、初代会頭に新家熊吉、副会頭に山田泰三・吉田藤米・中越良隆の3 名が選任され、翌44 年4 月1 日、加賀商工会議所が正式に発足しました。なお、当市の商工会議所の歴史を遡ると、明治13年の「大聖寺商法会議所」昭和22年の「江沼商工会議所」昭和33年の「加賀市商工連合会」などの変遷が記録されています。【正解率62.5%】

59 九谷焼 360 周年にあたる本年 8 月、加賀市、小松市、能美市の 3 市は、東京の（ ）で「九谷の系譜展」を開催し、会期中には天皇・皇后両陛下も鑑賞された。

- ①出光美術館 ②ステーションギャラリー ③森美術館 ④サントリー美術館

九谷焼 360 周年にあたる本年 8 月から 9 月にかけて、加賀市・小松市・能美市の 3 市共催による「交流するやきもの 九谷焼の系譜と展開」展」が東京駅の丸の内駅舎内にある「ステーションギャラリー」で開催されました。8 月 31 日には、天皇皇后両陛下がそろってご来館され、吉田屋窯の名品の一つ、九谷焼美術館所蔵の百合図平鉢などを熱心にご鑑賞されました。【正解率 47.9%】

60 山中温泉の芸妓、初代米八よねはちが、レコード盤で民謡「山中節」を出したのは、()
のことであり、これ以降、山中節が全国に広まったとされる。
①大正8年 ②昭和2年 ③昭和8年 ④昭和18年

山中温泉の芸妓、初代米八が、民謡「山中節」をレコード化して全国に売り出したのは昭和2年のことでした。米八よねはちの本名は安実清子（あんじつ・せいこ）で、福井県坂井郡金津町の出身の女性でした。米八は、芸事が好きで、唄、三味線、踊り、義太夫など幅広く身につけて、北陸一の名妓と呼ばれました。【正解率 91.7%】